

「招繇」の解釈について

——「招繇泰壹、舉洪頤、樹靈旗」——

山崎 藍

【おおよその解釈】

「於是欽崇宗祈、燎熏皇天。招繇泰壹、舉洪頤、樹靈旗。樵蒸焜上、配藜四施。(是に於いて欽つひみさいし宗たんとひ祈り、皇天に燎熏す。招繇泰壹、洪頤を舉げ、靈旗を樹つ。樵蒸焜ひらり上り、配藜して四に施く。)」

そこで恭しくつつしんで柴を燃やして福を祈り、捧げ物の煙で天をいぶす。招繇と泰壹と、洪頤の旗を挙げ、靈旗を立てる。太い薪、細い薪を一緒に燃やして煙を天に昇らせ、四方に煙を分散させる。

このうち、「招繇泰壹」について解釈する。

【校勘】

(1) 『漢書』顔師古注引張晏注・王先謙は「招繇」を「招搖」に、『漢書補注』引宋祁注内『晋灼音義』・『漢書補注』

引宋祁注内『蕭該音義』引如淳注では「臯搖」に、『文選』李善單注本では「臯搖」にそれぞれ作る。

(2) 『文選』五臣注本(『文選』六臣注本内割注)では「招繇泰壹」を「招搖太一」に作る。

(3) 『漢書補注』引宋祁注では「招繇一本作臯陶」と言及している。

【旧注・旧説の整理】

(1) 顔師古注・李善注引張晏注：「招搖、泰壹、皆神名也。」(招搖と泰壹は、どちらも神の名である。)

(2) 李善注引如淳注：「臯、挈臯也。積柴於挈臯頭、置牲玉於其上、舉而燒之、欲近天也。」(臯はつるべのこと。柴をつるべの先端に積み上げ、神に捧げる供物と玉をその上に置いて、全てを焼き、(その煙を)天に近づけようとするのである。)

『漢書補注』引宋祁注内『蕭該音義』引如淳注は、「臯、楔樸、積柴於招搖頭、致牲玉於其上、舉而燒之、欲其近天也。故曰臯搖。」とある。この「招搖頭」は意味が通らず、間違っている可能性がある。

(3) 李善注：「招與遙同也。」(「招」と「遙」は同じである。)

(4) 六臣注文選引李善注：「如淳曰招作臯。」(如淳は、「招」は「臯」に作るという。)

(5) 呂向注：「招搖、太一、皆星神名。」(招搖と太一は、どちらも星神の名である。)

(6) 胡克家『文選考異』：「臯搖泰壹。案、「臯」當作「招」、茶陵本作「臯」。云五臣作「招」。今考漢書作「招」、善與之同、故如淳解讀作「臯」、張晏解招如字、而兩引之。不知者但據如解改為「臯」、而張解不可通矣。袁本作「招」、不著校語、可知非五臣與善異、所見當未誤。注「如淳曰」。袁本、茶陵本「曰」下有「招作臯」三字。案、有者是也。說已見上。尤因所見賦誤「招」為「臯」、遂刪此注、以就正文、失之矣。」(臯搖泰壹について。案ずるに、「臯」は「招」に作るべきである。茶陵本(元の陳仁子が刻印した『增補六臣注文選』)は「臯」に作っており、「五臣本は「招」に作る」と言う。今『漢書』が「招」に作るのを考えると、李善はこれと同じだったのだから。だからこそ如淳は「臯」に作ると解釈し、張晏は招を字のまま解釈する。二つの説を、李善はいずれも引用しているのだ。それを理解しない者が如淳の解釈のみに拠って「招」を「臯」に改めたので、張晏の解釈は意味が通らなくなってしまう。袁本(明の袁褧が刻印した『六家文選注』)は「招」に作り、校訂の説明を記していない。このことからしても五臣本と李善単注本に異同のなかったことがわかる。(袁褧が)見た(李善単注)本は(まだ「招」のまま)「臯」に改めるといふ誤りがなかったのだ。注の『如淳曰』について。袁本、茶陵本で

は「曰」の下に「招作臯」の三文字がある。案ずるに、有るのが正しい。この理由はすでに上で述べた。(宋の) 尤袤は目にした所の賦に拠って、「招」を誤って「臯」とし、ついでこの注を削除して、本文に合わせたため、間違ったものになってしまった。⁽¹⁾

(9) 王先謙注：「文選作『臯搖』臯搖。『於是欽紫宗祈』単句領起『燎熏皇天』、與『招搖泰壹』對舉。如說是也。泰壹之祠、詳在郊祀志。招搖雖亦神名、施於此處則不類。」(文選單注本は「臯搖」に作る。『於是欽紫宗祈』の一句が「燎熏皇天」を導き出し、「招搖泰壹」とともに對句を作っている。如淳の説は正しい。泰壹の祠については『漢書』郊祀志に詳しい。招搖もまた神の名ではあるが、ここに用いられるのはつりあわない。)

(10) 『揚雄集校注』：「按、賦文「燎熏皇天」爲動賓句、「臯搖泰壹」對舉、亦當爲動賓句、如淳說是。李善引張晏曰「招搖、泰壹、皆神名也。」招搖雖爲神名、但其地位尚不足上配皇天與泰一。」(按ずるに、(甘泉) 賦の本文「燎熏皇天」は動詞目的語フレーズを作っており、「臯搖泰壹」はこれと對を爲すので、同じく動詞目的語フレーズでなければならず、如淳の説は正しい。李善が引く張晏は「招搖と泰壹は、どちらも神の名である。」という。「招搖」は神の名であるけれども、その地位は皇天や泰一とともに組み合わせられるほど高いものではない。)

(11) Knechtges 注：「The correct reading of this line is uncertain. The modern *Han shu* text reads *zhaoyao* 招繇, which Zhang Yan explains as the spirit Zhaoyao. The *Five Comm.* follows this same reading. Another version of the *Han shu* (presumably the one edited by Ru Chun in the third century) and the You Mao *Wen xuan* read *gaoyao* 臯搖. Ru Chun explains *gaoyao* 臯搖, which is a variant form for *jiegao* 桔槔, the name of type of swape used to raise beacon-fires on high. Zhu Jian cites a text (see *Shi ji* 28.1377 and *Han shu* 25A.1209) that mentions a type of pyre used to hoist the burnt offerings toward Heaven. Zhu also notes that parallelism with the preceding line requires the reading *gaoyao*. Although I have adopted this explanation in my translation, it is possible that the reading *zhaoyao* can be construed as a verb meaning "to

shake" or "to agitate." In this sense, the sacrifice affects even the Grand Unity Star, which begins to twinkle and flicker in response. (この行の正確な読み方はわからない。現代の漢書のテキストでは「招繇」とし、これには張晏が「神靈の招繇」であると説明している。五臣はこの解釈に従う。漢書の別の版本（おそらく如淳によって三世紀に校訂されたもの）と宋・尤袤本の『文選』は「皐揺」とする。如淳は「皐」を「挈皐」と説明するが、これは「桔槔」に対する別の言い方で、かがり火を高くあげるために使われた一種のはねつるべの名称である。朱拵『文選集釈』は、積み上げられた薪が、供物を燃やして天へ高くかかげるために使われたと述べる資料を引用している。朱はまた、先立つ句と対を為す関係から、「皐揺」と解釈する必要があると指摘する。私はこの説を自分の翻訳で採用したけれども、「招繇」を「振る (shake)」 「揺り動かす (agitate)」を意味する動詞として解釈することも出来るだろう。この意味ならば、いけにえの影響力は泰壹の星にさえ及び、そこで泰壹はきらめいたり、点滅したりして応答を始めるということになる。) Knechtges 氏はこの句を [Hoisted by pyre to Grand Unity.] (犠牲を焼く煙は、まきの山により高くかかげられ泰一に捧げられる) と訳しているが、Knechtges (1976) 訳では「The shakes and agitates the Grand Unity. (皇帝は泰一を喜ばせて揺り動かす、感動させようとする)」と訳している。

【問題提起】

上記を整理すると、

「招揺」説 ①「神の名」とする説 (張晏・呂向) ②「振る (shake)」 「揺り動かす (agitate)」とする説 (Knechtges) および、「皐 (皐) 揺」説 (「挈皐」 (つるべ) を使って泰壹に供物を捧げる (如淳・王先謙・朱拵)) とする二説に大別される。

「招揺」について、『漢語大詞典』は

「zhayao」……①炫耀・張揚。②山名。③借指桂樹。④星名。即北斗第七星搖光。亦借指北斗。

「shayao」……①逍遙貌。②搖動貌（用例『漢書』礼楽志「體招搖若永望。」顏師古注…招搖、申動之貌）。

と説明している。Knechtges氏は「zhayao」と読んでいるが、上記の「zhayao」①「炫耀・張揚」の意は、『史記』孔子世家「招搖市過之（市中をひけらかしながら過ぎた。）」の例のように、自分自身を飾り立てる、といった意味であり、甘泉賦の該当箇所には相応しくない。むしろ Knechtges 氏の説は「shayao」②「搖動貌」に近いと言えよう。

では「招搖」なのか、「皋（皐）揺」なのか。先に挙げた胡克家『文選考異』の指摘が正しいならば、「招搖」が正しいことになる。しかし李善は如淳の説を初めに引いており、「皋（皐）揺」（つるべ）とする説も捨てることは出来ない。また「招搖」を「神」の名と考えるならば、王先謙が指摘するように、泰壹神を祭祀する場所である甘泉宮で招搖神と泰壹神を対等に並べることは奇妙であり、前の句と対をなすと考えれば、Knechtges氏が提示した説、すなわち「招搖」は動詞ととるのが良いように思われる。ただし、これにも決定的な根拠はない。

【用例・考察】

本論は、招搖と泰壹は星神であり、その星座を象った文様が「洪頤」や「靈旗」に描かれたのではないかとする説を提起したい。

「洪頤」については、顔師古および李善が引用する服虔注に、「洪頤、旗名也。」（洪頤は、旗の名である。）とある。

「靈旗」については、『漢書』卷二十五郊祀志上に、

「為伐南越、告禱泰一、以牡荊、畫幡日月北斗登龍、以象太一三星、為泰一鍵（旗）、命曰靈旗。為兵禱、則太史奉以指所伐國。（南越を伐つ為に、泰一に告げ禱る。牡荊を以てし、幡に日月北斗登龍を畫き、以て太一の三星を象り、泰一の鍵旗と為し、命づけて靈旗と曰ふ。兵禱を為すに、則ち太史は奉けて以て伐つ所の國を指す。）」とあり、李奇注に、

「牡荊作幡柄也。(牡荊(ニンジンボク)で旗の柄を作るのである。)、顔師古注に「以牡荊為幡竿、而畫幡為日月龍及星(牡荊でもって旗の竿とし、旗に日月、龍、星をえがいた。)」とある。この注釈に拠れば、「(元鼎五年)南越を討伐するために、泰一に告げて祈った。牡荊を竿とし、日・月・北斗・登龍をさしものに描いて、太一の三星をかたどり、泰一の前鋒の旗として、「靈旗」と名づけた。武運を祈るに際し、太史は旗を奉じて討伐する国の方角を指し示した」という意味になり、「甘泉賦」本文「招繇泰壹、舉洪頤、樹靈旗。」の「靈旗」は泰壹神を象つたものと考えられる。

また『文選』「西京賦」には、

「建玄弋、樹招搖。棲鳴鳶、曳雲梢。(玄弋を建て、招搖を樹てて、鳴鳶を棲まわしめ、雲梢を曳く。)」

とあり、前二句の李善注に「玄弋、北斗第八星名、為矛頭、主胡兵。招搖、第九星名、為盾。今鹵簿中畫之於旗、建樹之以前驅。善曰、禮記曰、招搖在上、急繇其怒。鄭玄曰、繇讀曰勁。畫招搖星於其上、以起軍堅勁、軍之威怒、象天帝也。(薛綜注に)「玄弋は、北斗の第八の星の名で、矛の頭となり、異民族の兵士を統率する。招搖は、第九の星の名で、盾となる。今、鹵簿において玄弋と招搖を旗に描き、その旗をたてて先駆けとする」という。李善が言う。「礼記(曲礼)に、招搖は上に在りて、其の怒を急繇す」とあり、鄭玄は、繇は勁と読む。招搖星をその上に描き、軍隊を鼓舞し、軍隊の猛々しさを、天の軍隊になぞらえる(この部分は、李善単注本では「天帝」であるが、意味が通らないので、六臣注本の「天師」を用いて解釈する)」と注している。」とある。また、後二句の李善注に「禮記曰、前有塵埃、則載鳴鳶。棲、謂畫其形於旗上。雲梢、謂旌旗之流、飛如雲也。(薛綜注に)「礼記(曲礼)に「前に塵埃有らば、則ち鳴鳶を載す。」とある。「棲」とはその形を旗の上になぞらえることと言う。「雲梢」とは、旗の飾りの旗あしを言い、それが飛雲のようにしためくのである。」とある。以上の注釈に拠れば、本文は「玄弋の旗をたて、招搖の旗をたて、その先には鳴いている鳶を描き、旗あしは雲のようになびく」という意味になる。「招搖」一語で星神である「招搖神」が描かれた旗を指すことがわかる。

【結論】

『四庫全書』CD-ROMに拠れば、「洪頤」旗は「甘泉賦」本文以外には登場せず、上記の用例のみでは「招搖」を動詞とする説を否定するには根拠が足りないかもしれない。しかし、「泰壹」と「靈旗」の関係が密であること、「招搖」が描かれた旗が存在していたことは興味深い事実である。

そこで「招絲泰壹」には「つるべを使って泰壹に供物をささげる」説、「泰壹を揺り動かす」説の可能性を残しつつ、「招絲泰壹、舉洪頤、樹靈旗。」の三句を、「招搖神を象った洪頤の旗を挙げ、泰壹神を象った靈旗をたてる。」とする説を提起したい。

注

- (1) 『文選』（中華書局・一九九五年初版二〇〇五年第六版）所収のものを使用した。
- (2) 『禮記』曲禮上「前有塵埃、則載鳴鳶。」の孔穎達疏に、「鳶、今時鷓也。鷓鳴則風生、風生則塵埃起。前有塵埃起、則畫鷓於旌首而載之、衆見咸知以為備也。」とある。